福井大学での教育環境改善の取り組み

An Attempt for Improvement of Educational Situations in Fukui University

小 形 信 男

近年、大学を取り巻く状況は大きく変化しつつある。たとえば、独立行政法人化に関する問題、新指導要領実施に伴い理科学力低下が予想される2006年問題、18歳人口の減少傾向、入試制度の多様化による教育方法の改善などがあげられる。これらの状況に対応すべくそれぞれの大学は独自の方法で改革を進めている。そこで、以下に福井大学運営諮問会議の資料をもとに当大学が行ってきた改革の現状と将来構想について紹介する。

1. 工学部での研究の活性化

平成11年、12年に外部評価を実施し、工学部の将来像について検討してきた。その結果、各学科の今後の方針がある程度明確になり、構成教員の研究および教育、とくに教育に関する社会的責任についての自覚が深まった。現在、博士前期課程は7専攻、学生定員162名であり、平成11年度に設置した知能システム工学科の博士前期課程を平成15年度に開設する予定である。この課程の開設を契機として大学院工学研究科の再編を行うべく検討している。平成11年度補正予算で総合研究棟(9,000㎡,13階建)が現在建設中である。この中の1,893㎡を学内COE(先端科学技術研究)に当てることを計画している。この学内COEは、国際的研究や地域のニーズに合致した研究、環境やエネルギーなど時代のニーズを反映した研究を学内から公募して行うものである。また、産官学共同の推進では、先端繊維技術研究センター(IF-TEC)開設に向けた動向をあげることができる。

地域の産業の活性化を図るため、大学院工学研究科の中に学部を持たない「ファイバー・アミニティ工学独立専攻」の設置が計画されている。この独立専攻は従来の繊維関連工学を超えた広範な科学技術の展開を図り、地場産業の活性化に寄与することを目的としており、分野ではインテリジェントファイバー工学、情報センシング、感性デザインが考えられている。また、この動向の中で、平成14年度から繊維に関する寄附講座が繊維関連団体のご協力により開設される予定である。

NOBUO OGATA

福井大学工学部材料開発工学科教授
工学博士

〒910-8507 福井市文京3丁目9-1

Tel. 0776-27-8939 Fax. 0776-27-8939

e-mail ogata@matse.fukui-u.ac.jp

〈専門〉高分子物性、繊維物理学

〈趣味〉ドライブ、読書

2. 教育における改善

本学部の大きな使命の一つは、優秀な高度技術者の養成である。このために努力してきたが、さらに学生の質の多様化に対応した教育改善を実施する必要がある。入試制度では、学科の教育目標に合った学生が増えることを期待してAO入試の拡大が考えられている。現在の入学試験における個別学力試験では、物理または化学の選択である。このように多様な入試制度のため、大学入学時の学力の差が大きく、大学での授業が理解できない学生が増加し、学習意欲のない学生が多くなっている。このため初年度に個別学力試験が物理で受験した学生には化学の補習講義を、化学で受験した学生には物理の補習講義を行っている。今後、補習授業を拡大する必要があると考えている。また、英語教育の充実も検討されている。すなわち、英語を母国語とする教員を採用し、大学院博士前期課程1,2年生を対象とした「科学英語表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を導入する。また、学部と大学院での教育を連続した6年一環教育の可能性についても検討している。

つぎに、本年度よりBest teacher of the yearの制度が工学部で導入された。すなわち、学科の学生が教授方法の優れた学科教官一名を選び表彰する制度である。この選考は、3年時の学生が投票で行うものであり、真摯な態度で選考しているように思われる。この制度の導入は、教官に対して授業方法の改善の動機付けになると思われる。さらに、学生による授業評価結果の活用策、教員相互の授業参観などによる授業方法の改善策などを組織的に検討する必要があると考えている。

3. 工学部材料開発工学科・卒業生相互協会の設立

社会において広汎に活躍している卒業生との連携を密にし、福井大学工学部の活動を支援する相互交流組織として、福井大学工学部卒業生協会(仮称)の組織化を計画している。この協力会ではつぎのことを行う。①学生の実務経験と就職支援のためのインターンシップ制度の充実、②卒業生を対象としたブラッシュアップ・リカレント研究・教育、③共同研究・委託研究の推進、④卒業生による体験的な授業の実施、⑤卒業生による外部評価の実施と大学改革への提言の受け入れなどを考えており、その実施の可能性について調査している。最後に、多様化した学生の要求に対応する教育(知識と学ぶ力を付けること)と、地元を含めた産業界の要請する研究をどのような形でマッチさせるかが今後の課題である。